会報
札響くらぶ
2025年 8月 第110号
編集・発行／札響くらぶ 〒064-0931 札幌市中央区中島公園 1-15 札響事務局気付
ホームページ https://sakkyoclub.net/sakkyoclub/

2025年度 札響くらぶ 書面総会報告

「2025年度札響くらぶ総会」は、書面決議によって行われました。

「総会議案書」と「決議票」は、会報109号に同封して会員に配布し、決議票(郵便はがき)と、デジタル決議票(QRコードによるウェブフォーム)の何れかの方法で表決していただきました。

決議票は6月22日(日)24時00分を提出期限とし、翌日23日(月)札幌エルプラザにおいて、役員と運営スタッフの立会いのもと集計しました。

決議は集計結果をもとに次のように行いました。

・議長
武藤義典副会長(会長代理)
・集計報告者
高木誠一事務局長

【決議票集計】
配布した決議票 228通
(ホスト会員)
提出された決議票
郵便決議票 43票
デジタル決議票 47票
未提出 138票

【議案書の表決】
承認 222票
不承認 1票
白票 5票

以上のように、決議票228票中、222票の承認を得て「2025年度札響くらぶ総会議案」は原案通り承認されました。

なお、提出されなかった決議票は、既にご案内の通り承認とみなしました。

決議票の『意見・要望などの記入欄』には、14件の記入がありました。

①「札響くらぶサロン」に関するもの 3件
②楽譜支援金に関するもの 2件
③札響への要望と感謝のメッセージ 5件
④その他 4件

どれも今後の運営にとって大変貴重な意見や要望でした。主なものをご紹介するとともに、可能な範囲で回答いたします。

①「札響くらぶサロン」については、「サロンの開催を楽しみにしている一人です。これからもよろしくお願いします」、「八木先生のお話は、ユーモアがあって参考になります」など、皆さん毎回楽しみにされていることがわかりました。また「札響くらぶサロンは平日でも良いと思います」という、運営に関する意見もあり、大変参考になりました。サロンは楽員と会員を繋ぎ、また会員相互の交流やアカデミー活動の場でもあり、重要な活動として位置付けています。近年は、会場の確保や楽員さんとのスケジュール調整などに苦慮しておりますが、いただいた意見や要望は我々の励みになっています。今後もより良い「札響くらぶサロン」を目指して参ります。

②楽譜支援金についてですが、「楽譜運搬用トランクは札響くらぶならではの偉業と感動しています！」と、嬉しい評価をいただきました。しかし、活動の継続について厳しい意見もありました。会員減少により財源が限られていることを考慮し、毎年50万円の支援については見直す必要があるとの意見です。

今年度の楽譜支援金については、役員と運営スタッフで収支を精査し、例年通り50万円の支援をすることにいたしました。楽譜支援金の累計金額は今年度で1000万円に達し、節目を迎えます。次年度以降については、新たな支援方法を探り、2026年度の総会にて提案し、審議することにいたします。

決議票の集計を行った6月の運営会議

③④に関しては次のような記入がありました。

◎札幌の文化発展に益々のご活躍を期待しています。これからも、応援してまいります。

◎久し振りに札響のコンサートに行くことができました。とても良かったです。心に潤いが満ちました。いつも応援しています。

◎会員による定期のプログラムのリクエストや聞きたい曲など集計して札響に提案してほしい。

◎地方に住んでいますが、気持ちだけはいつも参加しています。

「札響くらぶ」は来年2026年で創立30周年を迎えます。これまで通り活動を継承するためには、次世代を担う会員を増やす必要があります。創立時の思いに立ち返り、時代に即した方法で若い世代に札響の魅力を知ってもらい、ファンを増やしたいと思っております。札幌交響楽団も「若きシェフ」を迎えて新時代へとスタートを切りました。「札響くらぶ」も新たな発想を持って、次の時代に向かって進んで行きたいと考えております。

札響くらぶ
事務局長 高木誠一

9月～11月 定期演奏会 名曲コンサート

演奏会を楽しく聴くために

八木 幸三（札響くらぶ顧問）

名曲コンサート
9月13日（土）14：00
指揮 マックス・ポンマー

■C.P.E.バッハ シンフォニア ニ長調

J.S.バッハの次男でバロック時代と古典派時代の端境期に生きた、カール・フィリップ・エマヌエル・バッハは、ベルリン宮廷でフリードリヒⅡ世の伴奏者として仕え、晩年にはハンブルクの音楽総監督となった。

この曲は、ハイドンやベートーヴェンに多大な影響を与えた「ハンブルク・シンフォニア」と呼ばれる6つの作品の第1番でバロック音楽のリトルネッロ形式から古典派音楽のソナタ形式への歩みを示す構成など、彼独自の様式が明瞭に表れた名曲である。

マックス・ポンマー

■ヘンデル 「水上の音楽」組曲 第2番

この曲は英国ジョージ1世が川遊びの折、ヘンデルに船上での演奏を企画させた折の作品。舞曲を中心に全22曲からなるが、ヘ長調主体の第1組曲、トランペットが活躍する第2組曲、木管楽器のアンサンブルが楽しめるト長調主体の第3組曲で構成される。これまで第1・2組曲が船上で、第3組曲が上流の休憩地で演奏されたと言われていた。しかし、近年の研究では第2・3は一つの組曲であったことが判明している。

■ブラームス 交響曲第2番

ブラームスの交響曲第1番と第2番は、対をなしていると言われている。このことは、ベートーヴェンの第5番と第6番の相似性と似ている。確かに第1番はハ短調であり第2番が「田園風」でおおらかな楽想を持つニ長調で書かれ、作曲時期がベートーヴェン同様、同時期に書かれている。ブラームスは第1番を20年ほどかけて完成させた直後、第2番をわずか四ヶ月で書き上げているのだ。アルプス山麓のヴェルター湖を眺望できるペルチャッハは、ブラームスにとって桃源郷のような地であったらしく、ハンスリックに宛てた手紙には「ここでは旋律がこんなに沢山生まれてくるので、散歩の時、それを踏みつぶさないように気をつけないといけない」と述べているように牧歌的な美しい旋律が何の誇張もなく展開されていく。

第672回定期演奏会
10月18日（土）17：00
19日（日）13：00
指揮 トーマス・ダウスゴー
ヴァイオリン 竹澤恭子

■ランゴー 弦楽四重奏曲第3番 「ラビア（怒り）」 （T.ダウスゴー編曲：管弦楽版）

後期ロマン派に属するデンマークの作曲家、ルーズ・ランゴーの作曲技法は、ミニマル性とトーン・クラスターなど、彼の生きていた時代にはやや早すぎた。そのためかほぼ忘れられた作曲家であったが、近年再評価の機運が高まっている。彼はワーグナーやR.シュトラウスの影響を受けているためか16曲の交響曲の他に大規模な管弦楽作品も多く残している。また、400曲以上の作品のうち150曲は歌曲である。

この四重奏曲は1924年に作曲されたが、この時期作曲者は、精神的・芸術的に非常に不安定な状態にあり、音楽界からの疎外感や孤立感を深く抱えていた。そのため、認められないことへの怒りや内面の葛藤が、この曲に色濃く表れている。極端な強弱、鋭いアクセント、鋭利なリズムを多用した原曲を指揮者T.ダウスゴー自らの編曲でどう演奏されるのか大注目だ。

トーマス・ダウスゴー

© Thomas Grøndahl

■ブラームス ヴァイオリン協奏曲

20年あまりかけ、やっと書き上げた交響曲第1番の後、ブラームスは堰を切ったように交響曲第2番や「悲劇的序曲」などを次々に書き上げる。そうした作曲家として充実していた時期にサラサーテのヴァイオリン演奏に感銘を受け書かれたのが、この名曲である。ブラームスは、交響曲でもそうであったようにベートーヴェンのヴァイオリン協奏曲を大きな目標としていた。それは、ともにニ長調で田園的、牧歌的おもむきが多分に感じられることでも言える。名ヴァイオリニスト、ヨアヒムの助言を受けながら叙情的なものと構成的なものを見事に総合させた作品として完成させた。今回は竹澤恭子の逞しい生命の息吹を感じさせるボウイングが堪能できることだろう。

竹澤恭子

© 松永学

■ニールセン
交響曲第４番「不滅」

北欧の作曲家の中でもデンマークの作曲家ニールセンは、20世紀中盤まではさほど知られていなかった。だが６つの交響曲をはじめ、劇音楽や室内楽など多面的ジャンルにわたり１８０曲ほどの作品を残し、20世紀後半には重要な作曲家であることが認識された。この交響曲の「不滅」という副題は、作曲家自身「音楽は生命とおなじように消滅し得ない不滅さをもつ」という意味合いを説明している。単楽章構成で、ティンパニを交えた戦闘的な開始部分の主題の後、木管を中心にした牧歌的な主題の対比が印象的。この作曲時期と第１次大戦が重なり、戦争と平和の意識が作品に込められ、人間の不滅への確信が高く掲げられている。

名曲コンサート
11月８日（土）14：00
指揮　エリアス・グランディ
ソプラノ　中江早希

■ベートーヴェン
交響曲第６番「田園」

「第５番」と同時期に書かれた交響曲第６番は、性格の違う双生児のように言われるが、両曲は後世の作曲家に極めて重大な影響を与えている。言い換えればこの２曲は音楽史を変えてしまうほどの作品なのだ。

「第６番」はベートーヴェン自身が「田園」と名付け、楽章ごとに「田舎に着いたときの楽しい気分」と言った叙景的な標題を持たせている。この曲に物語性まではないのだが、ベルリオーズの「幻想交響曲」の元祖であり、ロマン派交響曲の先駆けをなしていることは確か。さらに「交響詩」の原点とも言えるかもしれない。楽器編成でも「第５番」同様、ピッコロやトロンボーンが新たに登場するのも興味深い。いずれにしても苦悩を乗り越え自然賛歌への境地に達したベートーヴェンの精神性をじっくりと味わっていただきたい。

エリアス・グランディ
© Yasuo Fujii

中江早希
© Ayane Shindo

■ヨハン・シュトラウス２世
喜歌劇「こうもり」より
ワルツ「春の声」他

喜歌劇「こうもり」から〝私の侯爵様〟はアイゼンシュタイン家の女中アデーレがコロラトゥーラの妙技を聴かせる名アリア。その他ウィンナーワルツの名曲「春の声」をはじめウィーンの香り漂うシュトラウス２世のワルツやオペレッタの名アリアを鷹栖町出身の中江早希（ソプラノ）とグランディがたっぷりと満喫させてくれる。

第６７３回定期演奏会
11月29日（土）17：00
30日（日）13：00
指揮　川瀬賢太郎

■別宮貞雄
管弦楽のための２つの祈り

別宮貞雄はパリ国立高等音楽院でミヨーやメシアンらに師事。直截で単純明快かつ抒情的な表現を得意とし、様式的に見て新ロマン主義音楽の作曲家と言える。この曲はフランス留学で身に付けた「技術」の集大成として、初期創作活動の到達点となった出世作。第１楽章は「悲しみを持って」と題された前奏曲で、表情的でリリシズムに溢れた音楽が進行し、「深い悲しみ」が押し寄せる波のように心の底まで音楽が染みわたる。第２楽章は「雄々しく」と題され、堂々たるファンファーレに続き、「悪魔の音程」といわれる増四度による緊張に満ちた主題が登場しフーガが展開されていく。

■伊藤康英
管弦楽のための交響詩
「ぐるりよざ」

吹奏楽曲をはじめ多彩なジャンルの作品を作曲している伊藤康英の代表的作品。海上自衛隊佐世保音楽隊の委嘱を受けて作曲され、鎖国時代の長崎の隠れキリシタンの文化に着想を得ている。命の危険にさらされながら、厚い信仰心で歌い継がれてきた音楽をモチーフとしている。「ぐるりよざ」とは、長崎県生月島に伝わるキリスト教の聖歌〝Gloriosa（グロリオサ）〟が訛った言葉だ。伊藤自身による管弦楽版は２度の改訂がおこなわれ、第２楽章は吹奏楽版よりも50小節ほど長くなっている。

川瀬賢太郎
© Yasuo Fujii

■ストラヴィンスキー
バレエ音楽「春の祭典」

作曲者の３大バレエの中でもこの作品は、ロシア人独特の力強さがあり、野蛮なほどの扇情的なリズムを持つ。革新的な現代派の巨匠として、ストラヴィンスキーの存在を世に知らしめた作品と言ってよい。この曲の持つエネルギーは実に凄まじく、初演時は会場の聴衆がこの曲の是非をめぐって乱闘騒ぎにまでなった逸話は有名。作品が持つ複調的効果、オスティナートによる陶酔感、そして神秘的色彩感を心ゆくまで体感して欲しい。

（写真提供　札幌交響楽団）

札響での34年を振り返って

6月末をもって札響を卒業いたしました。34年10ヶ月…考えれば長い年月ですが、終わってみればあっという間の時間でした。札響くらぶの皆さまには〝札響応援団〟として陰に日向に私たちのためエネルギーを注いでくださいました。心から御礼申し上げます。本日は、ページをいただきましたので、入団（1990年）から現在（2025年）までを振り返ってみます。

1990年春、留学先のウィーンから3年振りに帰国した私の実家に1本の電話が来ました。その夏に第1回の開催が決まっているものの、参加者を募るのに困っていたPMFの組織委員会からでした。帰国したばかりで暇だった私は、夏に涼しい札幌だから避暑が出来る！と二つ返事でオーディションを受け、初回アカデミー生として参加。7月約一ヶ月の音楽漬けの日々は楽しく刺激的でした。

当時の札響には大学の同級生だったファゴットの坂口くんが入団しており、私が札幌に来ていることは札響のホルンセクションに知られることとなりました。「PMFが終わったら一ヶ月ほど札響を手伝ってくれないか？」というこの上ない嬉しいお誘いをいただき、8月もそのまま避暑を兼ねて札響で仕事を続けました。やがて8月も終わる頃、苫小牧市民会館での仕事の時に「島方は札幌で我々と共に吹いていく気はあるか？」と問われたのです。すぐに「よろしくお願いいたします!!」と、トントン拍子に札響への入団が決まり札幌に移住してきました。

その頃、札響定期演奏会の会場は北海道厚生年金会館で、終演後はいつも先輩や同僚たちと会館の裏手にあった焼き鳥屋に行ったことも善き思い出です。また、札響の特徴のひとつは演奏旅行が年間の活動の約4割となることです。各地に赴いては美味しいお店を探したり温泉巡りをしたり、ゴルフに釣りにと北海道を満喫させていただきました。

1997年に定期演奏会の会場は念願の札幌コンサートホールKitaraに変わります。出来上がったばかりのKitaraでスリッパを履いての初音出しは、興奮の中で素晴らしい体験となりました。オープニング記念として、秋山和慶先生でレスピーギのローマ三部作や岩城宏之先生のストラヴィンスキーのバレエ三部作を賑々しく演奏し、お祝いしたことをよく覚えています。Kitaraは日本の中で一番の響き、ゴージャスなコンサートホールで、〝日本の宝〟です。ここでたくさんの演奏会が出来たことは私の誇りです。

札響での数ある演奏会の中で印象に残っているものといえば、オーストリアの名匠にして札響2代目シェフ、ペーター・シュヴァルツ先生やテオドール・グシュルバウアー先生との共演、ジャン・フルネ先生との「ドビュッシー・海」、長く札響を率いた尾高忠明先生との数ある共演の中では「マーラー9番」が、また最近となりますが、大植英次先生との「ブルックナー8番」、マティアス・バーメルト先生との「ブルックナー6番」などが思い出深く、記憶に残っています。そうして2025年、今年就任のシェフ、エリアス・グランディとの共演は今後の札響の素晴らしい未来を感じさせるものとなりました。私は、若き優秀な札響と若き巨匠マエストロ・グランディとの融合を心から楽しみにしております。

私の夢は、札響が定期演奏会は常に満席でチケット争奪戦が起きるようなオーケストラになることです。今後は私も1人の〝札響応援団〟となって、自分なりにいろいろな方法で札響を応援していきたいと思っております。これからも何卒、よろしくお願いいたします。

島方晴康

ホルン奏者　**島方晴康さん**

6月退団

エリアス・グランディと

誰を笑顔にするのか ― 新庄日ハムをヒントに

プロ野球もクラシック音楽もライブが最高だ。そしてどの座席に座るかによって楽しみ方も大きく変わる。クラシック音楽の場合は、指揮者の表情と指揮棒の動きがよく見える、真正面の座席がいい。ステージ上の楽員になって指揮に合わせて演奏している気分になれる。だから演奏が終わった後の大きな拍手は本当に気持ちがいい。一人一人の顔がよく見えるコンサートホールキタラの場合だと、満席なのか空席がどのくらいあるのかがよく見えるので、始まる前の集中力もかなり変わってくる。といったように楽員の気持ちがよく理解できる。またプロ野球の場合は、選手全体の動きだけでなくて両チームのベンチ、監督やコーチの動き、バッテリーのサイン交換など、試合運びの細かい動きがよくわかる、外野のライトの守備位置の右斜め後方の座席が最高だ。応援しているチームの選手になった気分で試合に参加できる。だから満員の観客からの大きな拍手や声援は選手にとって大きな力になることがよく実感できる。

そんな楽しみ方をしていて一番気になるのは空席の有無である。北海道日本ハムファイターズの場合、エスコンフィールドHOKKAIDOという新球場ができ新庄監督2年目で大いに期待されたが、チームの不振もあり、空席がかなり目立つ日が続いた。その後球団や関係者の努力で球場に足を運ぶお客さんは増

ヴァイオリン奏者　橋本幸子さん
8月退団

貴重な体験　演奏旅行

札響に入団して今までの人生の半分以上の年月を過ごしてきました。何も出来ない私がこれほど永く演奏に専念して過ごしてこられたのは札響を支えてくださった札響くらぶの皆様、聴きに来てくださったお客様、事務局員、団員の皆様のお陰です。札響にいらした指揮者、ソリストの方々からも多くの事を学ばせていただきました。心から感謝して御礼申し上げます。

何より作品を通して数々の偉人の作曲家に時空を超えてお会いしているような感覚になる事をいつも幸せに感じていました。最も好きな作曲家はベートーヴェンです。本当にお会いして楽曲について質問攻めしたいです。一日一日演目の曲を探究し練習の繰り返しを、積み重ねていつの間にか36年経った感覚です。

札響では演奏と同じように演奏旅行も大事な仕事の一つです。私は旅をしてその土地の文化、人や食に興味があったので毎回刺激を受け豊かな経験をさせていただきました。

初めての演奏旅行は旭川から稚内の道北旅行でした。稚内でのおもてなしのカニの種類と量と焼きガニの美味しさの驚きと感動は今でも覚えています。

入団して初めての海外演奏旅行は東南アジア6カ国で、なかでもブルネイ、フィリピンは未知の国でした。訪れるとどちらの国の人も瞳が澄んでいて明るい笑顔が印象的でした。市場は果物の種類が多くて見た事のない鮮やかな色や滑稽な形はまるで美術館のようでした。

心に残っている旅行はヨーロッパツアーです。主にヨーロッパ音楽を演奏しているので人々の生活や文化は特別興味がありました。教会、駅等、建造物は圧巻で街の雰囲気は映画の世界でした。食文化は生活に根付いて、レストラン、カフェ、パブ、それぞれどの国もおしゃれで、美味しくいただきました。店員さんや隣の席のお客さん等、メニューについてとても詳しく説明されたり好みを聞かれたり、やはり食を楽しむのに時間を惜しまず時を楽しむ土地の人と交流出来て心もお腹もいっぱいになりました。

本当に沢山の貴重な経験をさせていただきました。まだまだ自分自身の演奏課題は多いのですが、より良い演奏ができるように札響で学んだ事をこれからの人生に活かして過ごしていきたいと思います。

長い間お世話になり感謝いたします。重ね重ね御礼申し上げます。皆様のご健康とご多幸をお祈りしております。

橋本幸子

シュヴァイネハクセ
皮付き豚すね肉のロースト

ヴァイスヴルスト
白いソーセージ

ドイツ　ビールと共に！

えたが、球場が熱気に包まれ満員になったのは、チームとして力をつけ、いい試合、見ていて応援したくなる試合ができるようになった昨年後半ぐらいからである。では札幌交響楽団の場合はどうだろうか？

ここで新庄監督が北海道日本ハムファイターズの新監督に就任した時のコメントがヒントになりそうなので、取り上げてみたい。

『プロ野球の存在意義は、この街に住む人たちの暮らしが少しだけ彩られたり、単調な生活を少しだけ豊かにすることに他なりません。その裏側に誰を笑顔にするのかを常に心に秘めて新庄剛志らしく突き進んでいきます！』

新庄監督は、なぜ、何のためにプロ野球は存在しているのか？というテーマに対して明確に想いを発信してチーム作りに取り組んできた。それでは札幌交響楽団の存在意義とはなんだろうか？

私が大学卒業後に北海道で働くことが決まった時、先輩が「北海道には札幌交響楽団という素晴らしいオーケストラがあるよ！」と教えてくれた。札幌からかなり離れた赴任地で札幌交響楽団の地方公演に行ってみたところ、生のオーケストラの迫力ある音楽、心洗われるような美しいメロディーに、満員の聴衆が満面の笑顔で割れんばかりの拍手を興奮して送っていたのがとても印象的であった。まさに「誰を笑顔にするのか」であった。音楽には色んな力がある。今こんな時代だからこそ音楽を必要としている人たちはたくさんいるはずである。

また新庄監督はお客さんではなくファンという言葉を使っているが、ファンでない人にどうやって足を運んでもらってファンになってもらうかを常に考えている。ファンでない人でも気軽にクラシック音楽に触れる場を増やすだけでなく、各楽員、指揮者、コンサートホールに興味を持ってもらうことから始めてみてはどうだろうか。世界的にも有名なキタラを本拠地とする札幌交響楽団に日本各地、世界各地からもファンが集まり、「〇〇から来ました」や推しの楽員さんの名前のタオルが満員の客席を埋める光景が見たいものである。

会員／山崎恒平

最近の定期演奏会を聴いて

札響の新年度は、エリアス・グランディの「復活」で始まった。前回の尾高忠明指揮の名演から早くも18年。今回も、堂々と力強い、完成度の高い演奏であった。札響も合唱団も指揮者の要求によく応えていたと思う。ソリストの立ち位置の工夫や、曲の途中での合唱団の入場など、話題性も豊富だった。

エリアスは6月定期にも登場し、「ドン・キホーテ」と「ダフニスとクロエ」を取り上げてこちらも好演。R・シュトラウスでは大編成オーケストラの多彩でダイナミックな表現がたっぷりと味わえた。ラヴェルの第1組曲ではドビュッシー的な色彩豊かな響きに酔い、第2組曲の「全員の踊り」ではオケが強い一体感で狂騒というべき盛り上がりを見せた。こうした劇的な曲は、エリアスの十八番といってよい。

エリアス指揮の時には第2ヴァイオリンを向かって右手に配置するクラシックスタイルが用いられる。第2ヴァイオリンの音が目立つので、聞き慣れた曲が新鮮に響く場面が何度もある。エリアスが記者会見で影響を受けたと語っていた大指揮者オットー・クレンペラーもこのスタイルで演奏していたことを思い出した。

5月定期のメインは、ハインツ・ホリガーの「グレイト」。ホリガーほどのビッグネームを今年も札幌で聴けることの幸せを噛みしめる。

冒頭のホルンのソロはどこか懐かしい「青春の響き」で、しみじみと聴きたいところだが、ホリガーは早めのテンポで淡々と進め、感傷に浸らせてくれない。その後もテンポよく進み、主部に入ってさらに勢いを増す。弦楽器によって繰り返されるタッタラッタラッタラッタラの動機も力強い。ホリガーは早めのテンポで、各パートの動きを明確に抉り出す。メロディーに浸ることはできなかったが、曲の立体的な構造が明確になり、音楽の持つ力がそのまま伝わってくる。

ハインツ・ホリガー
（写真提供　札幌交響楽団）

この曲ではトロンボーンが活躍する。1楽章ではソロが何度も出てくるが、首席の山下さんの、たっぷりと柔らかな、熟成した赤ワインを思わせる響きに魅了された。札響のトロンボーンは響きが柔らかくよく溶け合う。もっと硬い音が欲しいと思うこともあるが、この演奏ではその美音が存分に生かされていた。4月の定期「復活」のソロも素晴らしかった。

「天国的な長さ」と言われる曲だが、ホリガーは各楽章の反復を忠実に実行したため、その長さがさらに強調された。この曲は生演奏でも録音でもいろいろ聴いたが、反復を忠実に行うのは珍しい。札響は演奏者が消耗すると言われているこの大曲を、分厚い響きを最後まで保って聴かせてくれた。前半を含めて、満足度の高い演奏会であった。

会員／多田真一

日本のプロ・オーケストラ ①

日本国内にプロのオーケストラはいくつあるのだろうか。

日本オーケストラ連盟（公益社団法人）が発行している「日本のプロフェッショナル・オーケストラ年鑑２０２４（２０２５年3月発行）」によると、加盟しているオーケストラは現在、正会員が27団体、準会員が13団体となっている。

今回と次回の二回にわたって、正会員と準会員の楽団名と本拠地を紹介する。

正会員

①札幌交響楽団　（札幌市）
②仙台フィルハーモニー管弦楽団　（仙台市）
③山形交響楽団　（山形市）
④群馬交響楽団　（高崎市）
⑤ＮＨＫ交響楽団　（東京都）
⑥新日本フィルハーモニー交響楽団　（東京都）
⑦東京交響楽団　（川崎市）
⑧東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団　（東京都）
⑨東京都交響楽団　（東京都）
⑩東京フィルハーモニー交響楽団　（東京都）
⑪日本フィルハーモニー交響楽団　（東京都）
⑫パシフィックフィルハーモニア東京　（東京都）
⑬読売日本交響楽団　（東京都）
⑭神奈川フィルハーモニー管弦楽団　（横浜市）
⑮富士山静岡交響楽団　（静岡市）
⑯オーケストラ・アンサンブル金沢　（金沢市）
⑰セントラル愛知交響楽団　（名古屋市）
⑱名古屋フィルハーモニー交響楽団　（名古屋市）
⑲中部フィルハーモニー管弦楽団　（小牧市）
⑳京都市交響楽団　（京都市）
㉑大阪交響楽団　（堺市）
㉒大阪フィルハーモニー交響楽団　（大阪市）
㉓関西フィルハーモニー管弦楽団　（門真市）
㉔日本センチュリー交響楽団　（豊中市）
㉕兵庫芸術文化センター管弦楽団　（西宮市）
㉖広島交響楽団　（広島市）
㉗九州交響楽団　（福岡市）

この中でわが札幌交響楽団は１９６１年の創立で、日本で９番目に誕生したオーケストラである。

最も古い歴史をもつオーケストラは「東京フィルハーモニー交響楽団」、創立は１９１１（明治44）年となっている。

また一番新しいオーケストラは「富士山静岡交響楽団」であるが、これは前身となる静岡交響楽団（創立１９８８年）と浜松フィルハーモニー管弦楽団（創立１９９８年）が２０２０年に合体して誕生したオーケストラである。

我々「札響くらぶ」はＪＯＦＣ（日本プロオーケストラファンクラブ協議会）の活動を通じて、いくつかのファンクラブと交流を持っている。年に一度、回り持ちで開催される総会・交流会において活動報告、情報交換等を行っている。その際には開催地のオーケストラ（仙台フィル・山響・群響・アンサンブル金沢・名フィルなど）を聴く機会に恵まれている。

ちなみに今年は群響ファンズの主催で11月に開催される高崎総会に参加して、群馬交響楽団によるマーラーの交響曲第８番「千人の交響曲」を聴くことになっている。

会員／村山英朗

質の異なる感動

大病治療の一環として、症状が落ち着いてきたこの6月、僕は積極的に演奏会に出かけるように心がけた。それが精神的に落ち込まない最善の方法と確信しているからである。

そんな中、6月8日バーメルト指揮／札幌交響楽団のモーツアルト後期交響曲は近来稀に見る出色の出来であった。

弱音の美しさを意識した音造り。39番交響曲の序奏部冒頭、ヴァイオリンが変ホ長調の32分音符の音階を駆け降りるパッセージはもう少し大きな音で存在が主張されてもいいかなと思ったが、それは計算済みであったのだろう。聴き手に集中を促す効果を発揮していた。加えて第3楽章のクラリネットの二重奏では、ちょっぴり憂いを帯びながらも典雅で、モーツアルトの魅力がふりまかれていた。

ソット・ヴォーチェでささやかれるK550のメヌエット楽章のトリオ部分の頭出し部分（42小節から）、丸みを帯びた弦楽器の爽やかな表情は、少なくとも僕には天に導かれるような空前絶後の瞬間であった。丁寧な音造りによる、音楽芸術の醍醐味ここにあり。まさにバーメルト芸術の到達点であった。この瞬間を経験できただけでも、当日会場に駆けつけた意味があった。

一年で最も陽の長い夏至近くの関東地方、梅雨が一服し、宵を迎えても街中には夏本番の熱気が漂っていた。しかし、ミューザ川崎シンフォニーホールのステージでは、それ以上に音楽家のエネルギーが爆発し、満員の聴衆が舞台から放射される熱にあおられた。

飛ぶ鳥を落とす勢いの若き指揮者、クラウス・マケラ（若冠29歳）に率いられたパリ管弦楽団の演奏会（6月18日）。

サン＝サーンスの交響曲第3番と幻想交響曲という重量級のプログラムからも関係者の意気込みが伝わってきた。

16型ということもあったのだろうが、まず音量の大きさ、弦楽器の分厚い響き、そして管楽器の色鮮やかな音色にかつて経験したことのない陶酔を覚えた。指揮台のうえで跳びあがったり、脚をはね上げるなど運動量の激しい指揮者の動作もあれだけの豊饒な音楽を導いたのであろう。それにもかかわらず、バランス感覚もみごとであった。そこには、ひところの傾向とは異なる方向性が示されていた。

ただマケラという指揮者、きめ細かなニュアンスやエレガンスを追求する意図は持っていなかったようである。ただただ力の美学が披露された（なかでも幻想交響曲の第4楽章と第5楽章は圧巻であった）。パリ管の前身のパリ音楽院時代の、ビロードのような肌触りと繊細なニュアンスとは別次元の芸域で、そこに時間の隔たりを認識させられたが、間違いなく第一級の演奏会であった。フォルティッシモの威力と美しさに対する認識が広がった。

芸術の営みが高度な次元に昇華する瞬間に立ち会える機会はそれほど多くはない。そのような意味で、全く質の異なる感動の瞬間を経験できた6月は有意義な季節であった。

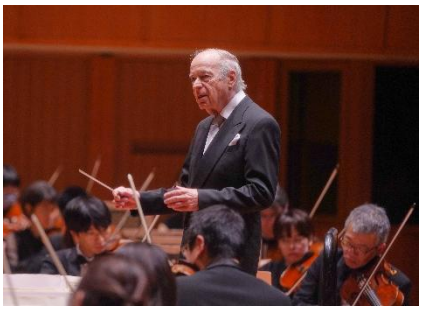
会員／村岡範男

個性異なる三つ子の交響曲

6月の「札響名曲コンサート」はバーメルトによるモーツァルトの三大交響曲であった。これは聴き逃がせない、と思ったのは私ばかりではなかったようだ。キタラはほぼ満席、期待と熱気に溢れていた。

演奏前のチューニングはクラリネットの音から始まった。木管各2本を基本とするベートーヴェンの交響曲とは違って、モーツァルトの交響曲では管楽器の組み合わせは曲によってさまざまである。39番ではオーボエが用いられていない。ファゴット2人、クラリネット2人、フルート1人が横一列に並んでいて、いつもとは違う木管の風景であった。

一方、弦楽器に目を向けるとこちらは大勢いる。過不足のない14型で50人。モーツァルトにしてはあまり見ない大型だったので、3曲ともこのままなのだろうかと思っていたが、トランペットとティンパニが抜けた40番ではやはり12型に組み替えられた。


（写真提供　札幌交響楽団）
マティアス・バーメルト

39番は何といってもメヌエット、とりわけトリオが楽しい。2本のクラリネットとフルートが美しく絡み合う中にホルンが合の手を入れていた。この日、第4楽章は珍しく終わりの部分が楽譜通り（？）リピートされた。意外でもあり、ちょっと得をした気分にもなった。

40番も第3楽章のトリオに注目。フルート、オーボエ、ファゴットが優雅に歌っているところに、自己主張をするかのように入ってくるホルンにいつも耳を傾けている。今回もしっかり見（聴き）届けた。

この3曲に甲乙をつけることはできない。しかし、私がCDで聴く頻度は決まっている。①ジュピター、②39番、③40番の順である。40番は悲劇的で、少々重く感じるのである。悲しさ、寂しさの中にあっても、明るく振舞うのがモーツァルトではなかったのかと。3曲それぞれに個性を与えたに違いない、とは思いつつも。

ジュピターは気宇壮大、開放感に満ちている。この雄大かつ壮麗な交響曲を演奏するにはやはり50人の弦楽器が必要だったのかもしれない。

3曲の演奏を終えた時、時間はすでに2時間を大きく超えていた。それでもアンコールに応えてK136の第3楽章が演奏された。

バーメルトのモーツァルトは期待に違わぬすばらしいものであった。演奏後、バーメルトは何度もステージに呼び出された。それでも拍手はなかなか鳴りやまず、ついには両手を枕にして退場したはずのバーメルトがさらに呼び戻されるほどであった。

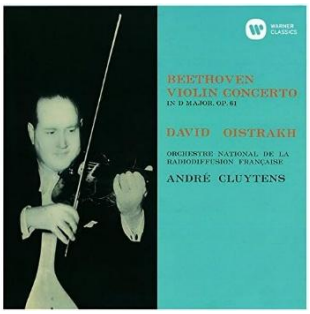
会員／村山英朗

僕の愛聴盤⑭
名曲に横綱相撲で対峙

○ヴァイオリン協奏曲ニ長調　作品61
（ベートーヴェン）
ダヴィド・オイストラッフ
（ヴァイオリン）
アンドレ・クリュイタンス指揮
フランス国立放送管弦楽団
（58年録音）

今はもう存在しない札幌市民会館のホールで、恰幅のいいヴァイオリンの響きに酔ったのは半世紀以上も昔のことである。1969年11月、横なぐりにたきつける雨が晩秋の大気の冷たさをことさら強調していた。しかし、会場内には当時ヴァイオリン界第一人者であったオイストラッフ奏でる5度6度の和音のぬくもりが充満していた。なんと振幅豊かで、暖かいブラームスのソナタだっただろう。

その頃は東西冷戦の緊張感が世界中を支配していた。政治のみならず、スポーツ、芸術の分野でも東西両大国は覇権を競っていた。その意識は西側に強く、特にヴァイオリン奏者については、ハイフェッツ、スターン、ミルシティンなど多くの大物を抱えるアメリカが、ソ連との対抗意識むき出しで合衆国の優位を強調していた。しかし、オイストラッフだけは別格の存在として西側の注目と尊敬を一心に集めていた。



そのオイストラッフが絶頂期に最高の録音を遺してくれたのである。ロマン・ロランによって「傑作の森」と呼ばれた、作曲者の最も脂がのっていた時期の作品、西洋音楽史上最高のヴァイオリン協奏曲のひとつと位置づけられるこの佳作に、オイストラッフは真正面から対峙し、横綱相撲ともいえる堂々たる演奏を展開しているのだ。スケールの大きな構成、包容力豊かな音像は彼の独壇場、クライスラー作のカデンツァについてもこの奏者の器の大きさを証明して余りあるものとなっている。

フランス音楽に真価を発揮するクリュイタンスとは一期一会の出会いだったのかもしれないが、この指揮者の持つラテン気質がここではプラスに作用し、想像以上の相乗効果を発揮している。永遠の名盤である。

会員／村岡範男

随想　本棚の隅から　30

昨年の9月に「北海道大学合唱団OB会」の演奏会があった。高校時代の同級生からチケットを頂いた。日曜日の午後、カナモトホールに老若男女の長い行列ができていた。

団員の卒業年をつぶさに見ると年長は昭和33年卒業の方が2名もいらっしゃる。令和6年卒業が2名いる。卒業したばかりの若者だ。平成と令和の卒業生が半分ほどいるせいか力強い合唱だった。途中で座り込んだ団員が居た。ご年配の方だから長時間の立ちっぱなしは辛かろうなとひそかに同情する。

プログラムも内容の濃い、満足感のある演奏会だった。

ステージ1
男声合唱組曲
「わがふるき日のうた」
作詞　三好達治
作曲　多田武彦

Ⅰ　甃のうへ
Ⅱ　湖水
Ⅲ　Enfance finie
（過ぎ去りし幼年時代）
Ⅳ　木兎
Ⅴ　郷愁
Ⅵ　鐘鳴りぬ
Ⅶ　雪は降る

プログラムには「日本の男声合唱を語るうえで、タダタケを外して語ることはできない」とある。三好達治の詩に曲をつけるのは難しいだろうなあと思う。

ステージ2
「北のうたびとたち」
～北海道出身アーティストの作品を集めて～
・地上の星　中島みゆき
・青春時代　森田公一
・あの頃へ　玉置浩二
・季節の中で　松山千春
・麦の歌　中島みゆき

ステージ3
「男声合唱とピアノのための組曲『夢の意味』より」
・夢の意味
・夢の名残　その他2曲
作詞　林望
作曲　上田真樹

ステージ4
男声合唱組曲「方舟」
作詞　大岡信
作曲　木下牧子

日本語の美しさを堪能する。家に帰って、本棚に三好達治の詩集と大岡信の「詩への架橋」を見つけたので、三好達治の合唱曲にあった「Enfance finie」を読み、大岡信が愛唱していた詩のなかに三好達治の「Enfance finie」を見つけた。単なる偶然だろうけど…。大岡信が若いころに暗唱していたという詩の何篇かは私も友達と学校帰りに諳んじたものだった。青春時代というものは皆同じようなことをするんだなあと、しばし高校時代の友達に思いを馳せる。

今年の5月にまた同じ同級生から、「高齢者可の合唱団に参加し、発表会があるので」とチケットを頂いた。「頑張っているなあ」と思いつつサンプラザへ。それは札幌放送合唱団のOB会がルーツの「KIBO」と言う混声合唱団だった。男性団員18名中、7名が北大合唱団のOBだった。

会員／井上明子

スタッフの声

▼ヒタル定期。フォルクハルト・シュトイデ氏のコンサートマスターとヴァイオリン独奏でモーツァルト、ジョン・ウィリアムズ、ドヴォルジャークを聞いた。正真正銘ウィーンの香り。札響メンバーも感性が鋭かった。「弾き振り」は音楽そのものを伝達して、まるで「魔法使い」。札響オケは「魔法使い」の弟子たち。魔法にかかった私は、ウィンナワルツを口ずさみ軽くステップしながら家路についたが、千鳥足に見えたかも知れない。（松本）

▼この原稿を書いている7月中旬は札幌も真夏日になる「暑い」日々が続いている。そしてこんな夜にブラームスの交響曲第1番（1990年サイトウ・キネン・オーケストラ／指揮：小澤征爾）という「熱い」曲を聴いている。私はブラームスのこの熱苦しさが好きでもある。そしてわれらが札響を考えると「厚さ」を感じるのである。実力のある若い楽団員が入って音の層が厚くなったなぁと。（前島）